

富士見町のすがた

○位置・地勢

本州の中央部に位置し、長野県の東南部にあたる。釜無川・甲六川を境に山梨県の北杜市に接しており、北は茅野市・原村、西は伊那市に隣接している。標高は最も低い所が下蔦木の釜無川河床の700mで最も高い所が八ヶ岳主峰の赤岳の2,899mとなっている。町の東部は雄大な八ヶ岳連峰を背後に控えその裾野が尾を引き、なだらかな傾斜地となっている。一方、西部は背後に急峻な赤石山脈を控え、平地が少なく起伏に富んだ地形を形成している。また、天竜川と富士川(釜無川)の分水嶺となっている。

○気 候

冬は三寒四温が繰り返される内陸気候で、年間を通じて冷涼な日々が多く、夏は特に高原特有の涼風が吹きぬける快適な避暑地となっている。近年の気象状況を見ると、年間平均気温が10℃前後で、年間平均降水量は1,210mm前後となっている。

○自然環境

当町には東北日本と西南日本を二分する「フォッサマグナ」の糸魚川静岡構造線が通っていて、東北部の多くは八ヶ岳火山列と広大な裾野が広がり、西部は入笠・釜無山地とわずかな扇状地から成り立っている。地質は国道20号線に沿い宮川～休戸を経て釜無川を結ぶ線を境にして、八ヶ岳側と西山側とでは、地質の区割りが大きく異なっていて、八ヶ岳側は単色系の地質分布を呈するのに対し、西山側は多種多様な地質から形成されておりかなり整然と区割りされた形状を呈している。植生的には標高が最も高い赤岳山頂から下蔦木地区間での標高差が約2,200mもあることから、面積の割には著しく種類が多く、貴重な植物も生存している。

○歴史的背景

今からおよそ3万年前から1万3千年前の氷河時代には、すでに古代の人々が暮らしていたとされる。八ヶ岳一帯は本州最大の良質な黒曜石の産地であったため、縄文時代中期にはわが国でも栄え井戸尻・藤内などの著名な遺跡が数多く残されている。しかしこの時代の人々が富士見町民の直接の祖先となったわけではなく、この地に人々が定住し始めるのは、農業生活が主体となってからのようである。

富士見の村の地名が文献に登場するのは、戦国時代になってからのことで、蔦木郷・小東・神戸の名が「神使御頭之日記」(1528～54年)に記されており、それ以前から集落があったことが伺える。江戸時代には甲州街道が整備され、町内を縦断していて、蔦木宿が置かれて宿場町としても栄えていた。さらに八ヶ岳を水源とするきれいな水が豊富であることから、この時代に大規模な新田開発が次々に行われ、米の生産高は激増している。また明治37年の中央東線富士見以東の開通により、当地は東京と結ばれるようになった。鉄道開通は人と物資の輸送を通じ内陸に位置し、陸路による輸送に頼っていた当地域の産業において大きな発展をもたらした。

近年、高速交通網の発達に伴い中央道・諏訪南ICが昭和56年3月より供用開始となり、これにより首都圏と富士見町を結ぶ大動脈が連結され、町の経済発展と住民生活に大きな影響を及ぼした。現在の富士見町は明治7年に落合村・富士見村が明治8年には本郷村・境村が誕生し、ついで昭和30年4月に富士見村・落合村・境村・本郷村が合併して町制を施行したものである。